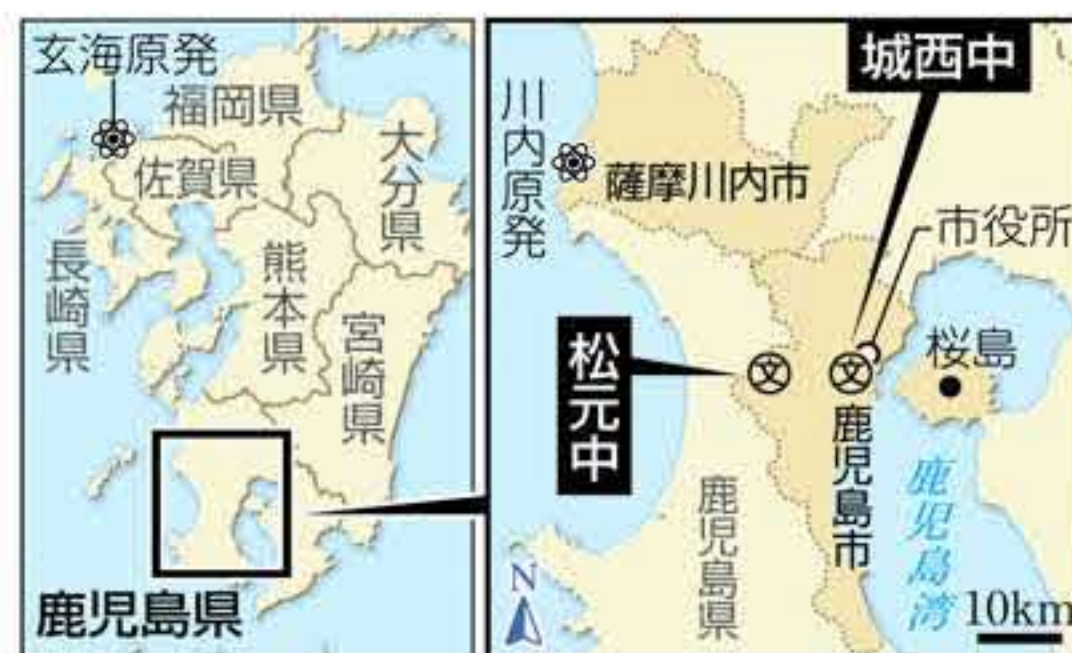


わたしたちの地域学習

鹿児島市内の中学校

《 5 》

東京電力福島第一原発事故が浮かび上がらせた、原発の再稼働や存廃問題。利害が直接絡む立地地域では「授業で扱いにくい」と敬遠する声が多い。その中で九州電力川内原発を抱える鹿児島県では中学生が新聞を使って、原発廃止の是非について意見を戦わせる「原発ディベート」に取り組んでいる。  
(世古絃子)



原発 新聞を活用しディベート

「原発の廃止は必要です。第一に原発は危険。全国紙の記事で、元首相が『原発は危険な核のごみを生み出している』とコメントしています」

「私たちは廃止に反対。原発がなければ、日本は火力発電に強く依存する。全国紙の社説によると原発の停止が続き、電力供給の約90%を火力発電に頼っています。追加燃料費は年四兆円近くかかっています」

二〇一五年、鹿児島市城西中学校であった文化祭の公開ディベート。「日本は原発を廃止すべきだ」という主題に対し、二年生の代表四人が賛成と反対に分かれて登壇した。立論(最初の主張)四分、質疑二分、反論二分で主に新聞記事をよりどころに主張を展開し、生徒や教員、保護者を前に説得力を競った。原発ディベートは、NIEアドバイザーで社会科の福丸恭伸教諭(左)と現・同市松元

タブー視せず、是非問う



中学校Ⅱが一〇年に始めた。理由は「原発を議論すること」をタブー視せず、地域の課題について考えてほしかったから」。全約十五時間の総合学習として不定期に実施し、本年度に三回目を予定する。これまで各回、二年生約三十人が参加し、二人ずつでチームを組んだ。チームごとに賛成と反対に分かれ、総当たり戦で討論し、観客役を務めるほかの生徒が、説得力の有無で勝ち負けを判定。その戦

歴などで公開ディベートの出場チームを選ぶ。準備では新聞を論点の整理と、論拠の収集の二点で活用する。論点整理に活用するのが社説。生徒は地元紙から全国紙、英字紙まで読む。福丸教諭は「原発に対する論調は各社で異なる。生徒が賛成、反対の立場で一から立論を考える時、ポイントにすべき点の参考になる」と説明する。論拠の収集では、記事を多用する。「インターネットよ

「原発は日本の未来を考える上で避けて通れないテーマ。新聞を読んでディベートをすることでまず知って、考えるきっかけにしたい」と話す福丸恭伸教諭(鹿児島市松元中)



新聞記事を論拠に示しながら、賛成と反対に分かれて主張を発表する生徒たち(2015年、鹿児島市城西中(福丸教諭提供))

九州電力川内原発がある薩摩川内市と隣接し、中心部から原発までの直線距離は約40\*。川内原発は1984年に1号機、翌年に2号機が営業運転を開始。東日本大震災後に定期検査で停止したが、震災後につくられた新規規制基準の審査に全国で初めて合格し、2015年に再稼働した。

立地地域で原発をテーマにしたNIEの例は少ない。原発のある全十三道県のNIE推進協議会などに問い合わせたところ、過去を含めて「実践例がある」と回答したのは三県のみ。実施していない理由は「利害が絡み、取り上げにくい」「存在の可否の判断を教員に求められる可能性がある」などだった。原発ディベートでは、生徒が相手への質問や反論を準備する過程で広く新聞を読み、相手の主張も同じように学ぶ。生徒からは「原発の利点と欠点に分かった」「賛成の立場だったが反対意見にも『なるほど』と思った」などの感想が出た。福丸教諭は「偏らず、幅広い見方を知ることができ。そこから自分の意見を確立してほしい」と期待する。 終わり

新人が背中追ってますよ

社会人になると、たとえ一年上でも先輩は偉大な存在に見えます。記者も同じです。てきぱきと取材をこ

いろいろなことを教えてくれます。事件現場では指示を出し、新人が落ち込んでいると相談にものります。新人は一步でも近づこうと背中を追っています。

狙うぞ特ダネ!? たなかひさし



新聞とわたし

毎朝、起きてすぐにポストに朝刊を取りに行くのが日課です。小学五年の時に宿題に出されるまで新聞は難しいと思っていて、読んでいませんでした。でも、開いてみるといろいろな種類の記事があり、とてもおもしろく読むようになりました。



森岡千晴さん

知識つまったコラムを愛読

いつも必ず読むのは一枚目に乗っているコラム。毎日一つのテーマについて書かれていて、テレビではあまり伝えられないようなこともあり、わかりやすくおもしろいです。ある日のコラムで選挙の投票所に十八歳未満の子どもも行けるようになったと知り、興味があつて親と出掛けました。政治などの記事にも挑戦し、さまざまな知識を蓄えていきたいです。(岐阜市岐阜西中三年)

